

ダーウィンとイギリス自然神学——適応としての人間本性——（要旨）

矢島 壮平（東京大学）

17世紀から19世紀にかけてのイギリスでは、この世界に見出される秩序や合目的性は生物を創造した神の英知の現れであり、その存在を示すものであると論じるデザイン論（argument from design）を理論的根拠とする自然神学が興隆していた。特に合目的性を備えた生物個体の形質、すなわち適応は、デザイン論が最も良く適用される対象であり、適応に関する他の代替的説明が存在しない限り、神によるデザインという説明は最善の説明として有効だった。チャールズ・ダーウィンが提唱した自然選択理論はまさにその代替的説明であり、生物個体が持つ適応を神の意図と無関係に説明することを可能にした。

一方でダーウィン自身、イギリス自然神学から大きな影響を受けていたことが知られている。彼はケンブリッジ大学在学中に読んだウィリアム・ペイリーの『自然神学』に深い感銘を受けていた。正統的なキリスト教信仰を捨てた後の『種の起源』初版執筆時にも、彼は理神論的な創造神を信奉していたと考えられ、『起源』は自然神学書の体裁をとっていた。

だが、神のデザインを自然選択に置き換えたことに加え、イギリス自然神学と比較して適応の説明という観点からダーウィンが一層際立つのは、一般に自然神学者たちが生物の身体的構造を説明の主たる対象としていたのに対し、彼が人間を含めた動物の心理形質をも進化によって獲得された適応として説明している点である。そして、同様に人間の心理形質を適応と捉えた上で、イギリス自然神学の伝統に立って人間本性（human nature）を神のデザインによって説明することを積極的に行っていた点で注目されるのが、18世紀スコットランド啓蒙の哲学者たちである。

本発表は以上のような背景の下、まず人間本性を神にデザインされた適応として説明していたスコットランド啓蒙の哲学者の一例としてアダム・スミスを取り上げ、そのデザイン論の構造をデイヴィッド・ヒュームのデザイン論批判と併せて検討し、さらに、スミスが信奉していたと同様の功利的デザイン論によってダーウィンに直接的影響を与えたペイリーの自然神学を概観する。最後に、伝統的自然神学とダーウィン自身のそれとの異同を明確にした上で、適応への着目という彼らに共通の観点が人間本性の探究において持つ意義について検討したい。